

令和3年度3学期始業式 式 辞

皆さん、新年明けましておめでとうございます。学校長の川崎芳徳です。

この度は、大変残念ですが、新型コロナウイルスの感染防止対策の観点から、放送での式典となりますこと、ご理解ください。

令和4年、寅年、西暦2022年がスタートしました。1月11日、希（まれ）に見る吉日、強運の日であり、新しいことをスタートするには絶好の日に、冬休み中、大きな事故も無く過ごされた、元気な皆さんと再会できたことを、心より嬉しく思っています。

冬休み、家族や友人、気の合う仲間と、充実した17日間を過ごせましたでしょうか。また、日本の伝統行事の空気に触れながら、少しは、ゆっくりゆったりとした時間を過ごせましたでしょうか。

さて、これまでも、たびたび話を出させていただいています、世界三大聖人、「孔子」は、生きていく上で、最も大切なことは、“恕（じょ：思いやり）”であると説かれ、仏教の開祖である「お釈迦様」は“慈悲”を、「イエス・キリスト」は“愛”を説かれています。宗教的天才とも言われるこの人たちが、最も大切であると説かれたことは、共通していることに気づかされます。

皆さんも、とりわけ年末年始は、日頃、忙しく過ぎる時間の中、なかなか感じる事ができない、ご家族の方などからの深い愛情や、多くの人との繋がりの中で生かされている、ということを実感できたのではないのでしょうか。

今日は、年始にあたり、「皆さんは、愛されています」ということについて、1925年、愛知県名古屋生まれの作家、西村 滋（にしむら しげる）氏の少年期の実話を紹介させていただきますので、少し聴いてください。

少年は両親の愛情をいっぱいを受けて育てられた。

殊（こと）に母親の溺愛（できあい）は近所の物笑いの種になるほどだった。

その母親が姿を消した。庭に造られた粗末な離（はな）れ。そこに籠（こ）もったのである。結核を病んだのだった。

近寄るな、と周りは注意したが、母恋しさに少年は離れに近寄らずにはいられなかった。

しかし、母親は一変していた。

少年を見ると、ありったけの罵声（ばせい）を浴びせた。コップ、お盆、手鏡と手当たり次第に投げつける。

青ざめた顔。長く乱れた髪。荒れ狂う姿は鬼だった。

少年は次第に母を憎悪（ぞうお）するようになった。哀しみに彩（いろど）られた憎悪だった。

少年6歳の誕生日に母は逝った。

「お母さんにお花を」と勧める家政婦のオバサンに、少年は全身で逆らい、決して柩（ひつぎ）の中を見ようとはしなかった。

父は再婚した。少年は新しい母に愛されようとした。

だが、だめだった。

父と義母の間に子どもが生まれ、少年はのけ者になる。

少年が9歳になって程なく、父が亡くなった。やはり結核だった。

その頃から少年の家出が始まる。

公園やお寺が寝場所だった。公衆電話のボックスで体を二つ折りにして寝たこともある。

そのたびに警察に保護された。

何度目かの家出の時、義母は父が残したものを処分し、家をたたんで蒸発した。

それからの少年は施設を転々とするようになる。

13歳の時だった。少年は知多半島の少年院にいた。もういっばしの「札付き」だった。

ある日、少年に奇蹟の面会者が現れた。

泣いて少年に柩（ひつぎ）の中の母を見せようとした、あの家政婦のオバサンだった。

オバサンは、なぜ母が鬼になったのかを話した。

死の床で、母はオバサンに言ったのだ。

「私は間もなく死にます。あの子は母親を失うのです。

幼い子が母と別れて悲しむのは、優しく愛された記憶があるからです。

憎らしい母なら死んでも悲しまないでしょう。

あの子が新しいお母さんに可愛がってもらうためには、

死んだ母親なんか憎ませておいたほうがいいのです。

そのほうがあの子は幸せになれるのです」

少年は話を聞いて呆然とした。

自分はこんなに愛されていたのか。

涙がとめどもなくこぼれ落ちた。

札付きが立ち直ったのはそれからである。

このような実話です。西村 滋氏は、放浪生活の後、少年養護施設の職員となり、そして、35歳の時には（1960年）、日本のトップ映画スター、石原裕次郎主演で、日活で映画化された『やくざ先生』という著書を、50歳の時には（1975年）、第2回日本ノンフィクション賞を受賞した「雨にも負けて風にも負けて」を、翌年51歳の時には（1976年）、全国青少年読書感想文コンクールの課題図書となり、同年、テレビドラマ化された「お菓子放浪記」など、多数の本を世に出し、作家として大成功を収め、6年前、平成28年（2016年）に、91歳で他界されています。

皆さんも、これまで多くの愛情をいただきながら過ごしてこられたことでしょうか。まだ気づいていない深い愛情に、歳を重ねていく中で気づかされることもあるでしょう。皆さんの存在を、生きがいとされている方が多くいるのです。

先祖代々、脈々と繋がり受け継いでこられた「命」、そして、その崇高な「命」を、手塩にかけて育ててくれた保護者の方などへの感謝を決して忘れず、今年も、一日一日、確かな歩みを続けてください。

3年生は、49日後が卒業式です。須磨友が丘高等学校でやり残したことはないですか。進路への挑戦は、胸を張って堂々と、自信を持って臨んでください。この、輝ける須磨友が丘の最高学年です。うまくいかないはずはないのです。

2年生は、いよいよ最高学年目前です。3年生の先輩にしっかり習いながら、加えて個性・独自性を発揮して行ってください。1年生は2年生になり、皆さんがそうであったように、今まさに、夢を持ち受験を控えている中学3年生が、40回生として、4月8日に入学してきます。楽しみにしてください。

それでは、今年も、笑顔、クイックスマイルを忘れず、皆さんにとって、幸多き、素晴らしい飛躍の年となりますことを、心より祈念し、令和3年度3学期始業式の式辞とします。

令和4年1月11日

兵庫県立須磨友が丘高等学校長 川崎 芳徳